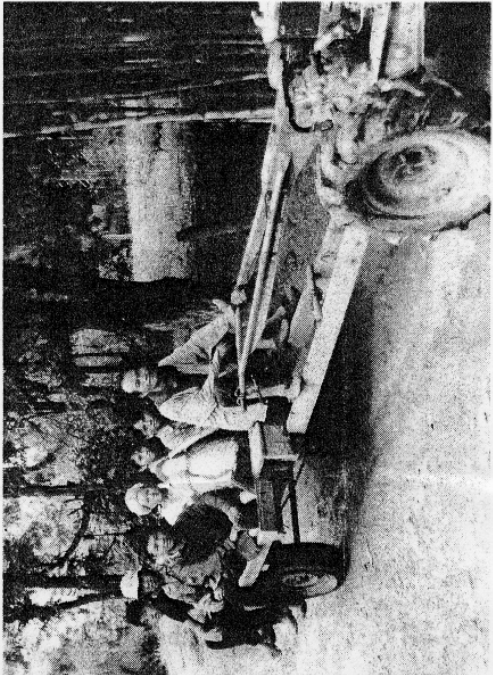




モンの村の生活

モン族は故郷の中国では苗(ミャオ)族と呼ばれる農耕民族である。タイに住むモン族も農耕で生活を営む。第二次大戦でラオスに住んでいたモンも多くは難民となり、一部がタイ北部の山岳地帯に住むようになる。

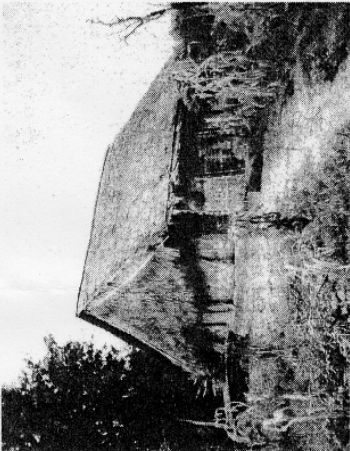
タイ政府は彼らが共産化した隣国の影響で共産ゲリラ化するのを恐れて低地定住策を進めた。こうして誕生した低地のモン族の村の一つがセーンサイ村だ。住民は約七百五十人、この村の家にホームステイ



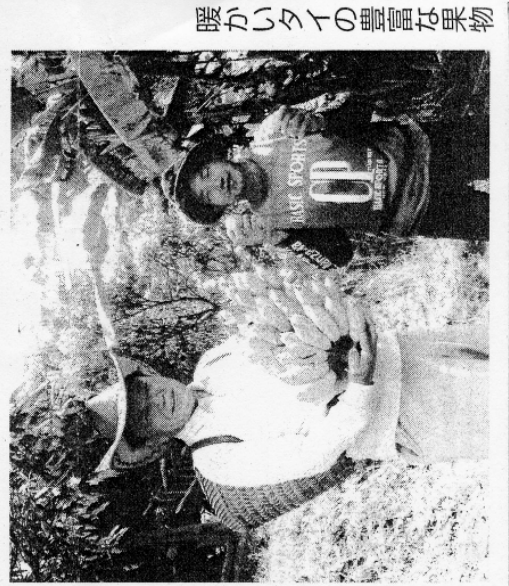
耕運機を改造した「イト」に乗る人々

させてもらった。タイ政府が低地に住むようにモンに配分した土地は住宅地と一世帯当たり一ライ(四十畝四方)の農地である。子どもが多く、一世帯七、八人と家族の多いモンの人たちにとって一ライの農地だけでは食べていけない。最低五ライは必要だ。このため仕方なく今まで住んでいた山の畑に通って農業を営んでいる。

最初は十、前後離れた山の畑に徒歩で通っていた。山にはバナナや名前の知らない果物がなっている。タイは暖かく、果物は豊富。果物の栽培などとの複合農業が今後の課題だとシャンタイ山口の佐伯事務局長は言わ



モンの平均的な家
「床はなく、ほとんどが土間」



暖かいタイの豊富な果物

ていたが、今はほとんどの人が「イト」と呼ばれる耕運機を改造した車で通う。しかし往復に時間がかかるので山に仮小屋を建て、そこに寝泊まりしながら農作業をしている。それでも農地はタイ農民の十分の一ほどで、これでは豊かな生活は難しい。

イトで近くの山の畑に連れて行ってもらった。山にはバナナや名前の知らない果物がなっている。タイは暖かく、果物は豊富。果物の栽培などとの複合農業が今後の課題だとシャンタイ山口の佐伯事務局長は言わ

れる。村を歩いて巨根や卵がないのに気づいた。食事中でも入り口から近所の方が平気で家に入ってくる。すると当たり前のように「食事はすんだか?」と聞く。「まだ」と言えば食事を勧める。隣人の心の垣根がない。たまたま泊まった日に隣の家に新しい耕運機が届いた。翌朝、朝食が終わると主人はすぐ隣家に出向き、近所の男性と一緒に耕運機をイトに改造する作業をした。「共生」がごく自然にされている。貧しいから互いに助け合い、分け合うことが当たり前なのだろうか。モンの人たちの生活から、豊かさとは何かと考えさせられた。(元山口放送取締役ラジオ局長)